慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	壮族のシンデレラとその周辺 : 重葬との関わりについて
Sub Title	Cinderella' from the Zhuang : its relation to the second burial rites
Author	君島, 久子(Kimishima, Hisako)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.266- 297
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0266

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

壮族のシンデレラとその周辺

―重葬との関わりについて―

君島久子

一、壮族のシンデレラ

中国のシンデレラの存在は、南方熊楠の指摘により、すでに唐代、段成式の『酉陽雑俎』續集巻一に記されていることが知られている。

ヨーロッパのシンデレラが、ほぼ十六世紀と推定すれば、九世紀に書かれたこの記録は実に七百年も以前ということになる。筆者はこの物語の伝承地、現在の江西壮族自治区を訪れる機会を得て、武鳴をはじめとする壮族の村々をたずね、壮錦の里へ車をかるなどしながら、親しく人びとの接する中で、今なおこの物語が愛され語られていることに感嘆した。話の内容も実にバライティに富んでおり、さまざまな問題を含んでいて興味深い。

先ずは壮族の代表的な民間文学の研究家、藍鴻恩氏の語る話(1)を紹介する。

「達架」という娘がいた。母の死後、父は後妻をめとり、妹「達侖」が生まれた。父の死後、後妻はタークを虐待

し、毎日柴刈や水かつぎのほかに、放牛をし、あいまに麻一斤をつむがせた。できなければ食事を与えないので毎日泣きながら麻つむぎをしていると、ターカの飼育している牝牛が、「その麻の皮を食べさせてくれれば、夕方、麻糸をだしてあげる。」という。

ターカがいわれたとおりにすると、牛は本当に白くて細い糸を一山ひり出してくれる。それを知った継母は欲をだして、三倍の麻皮を食べさせよとタールンにいいつける。

タールンがそのとおりにして待ちうけると牛は糞をした。怒った継母は牛を殺す。ターカが泣いていると、カラスが飛んできて、「牛の骨を芭蕉の根下に埋めよ」と教える。ターカはいわれたとおりにする。

ある日、およばれがあり、継母はタールンを着飾らせて連れてゆき、ターカには三斗の芝麻と三斗の緑豆をひろいわけよ、といいつける。ターカが困って泣いていると、カラスがきて、「箕と篩を用意すれば、芝麻と緑豆はひとりでに分れる。」と教える。その方法をとると、すぐ終わったので、およばれにかけつけることができた。

それからまた芝居があるとき、若い男女がでかけたが、継母はターカに、三つの大水がめに水を満たしてから来いといって、タールンと共に出かける。みると底のこわれている水桶なので、いくら運んでも水はたまらない。思わず泣き出すと、カラスがやってきて教える。「たがでしっかりしばり、麻でもれているところをふさぎ、泥でぬりつぶせ。」と、そのとおりにすると、水は一滴ももれない。水がめを満たし、芝居に出かけることができた。

年に一度、若者待望の歌墟（コーチユイ）（歌垣）の日がやってきた。青年男女は着飾って出かける。着飾ったタールンをつれて継母も出かけてゆく。ぼろぼろの身なりのターカを見て、自分で新しい衣裳をこしらえることができたらおいでという。ターカが泣いているとカラスが現れ、「衣裳は牛骨を埋めた芭蕉の根もと、靴は蕉蕾をあけてみよ。」という。ター

カがいわれたとおりに掘りおこすと、蕉葉に包まれた緑色のすばらしい衣裳が現れる。また芭蕉の蕾の中からは、金のふちどりをした靴がでてきた。すべてはターカの体にぴったりと合い、歌墟に出かけていく。ターカは遅くなったので急ぎ、橋にさしかかった時、「洞主の若さまが馬で歌墟にいかれる。」という声を聞き、急ぎ身をさけようとしてつまずき、片方の靴を川に落としてしまうが、そのまま彼女は歌墟に急ぐ。

洞主の息子が橋の下を見ると、川底に光るものがあるので、拾いあげてみると金色の靴だ。この息子は洞中の英雄で、りりしい若者。歌墟では娘たちのあこがれの的だ。お供が「若さまが金の靴を拾われた。なくした娘は受け取りにまいれ。」とよばわる。人々は彼を取りまき、靴をはいてみたが、足に合わずいずれも不合格、タールンの母もすぐさま娘に試みさせたが合わない。この時、群中から芭蕉の葉のような美しい衣をゆらめかせながら、美女が近づき、ふところからもう片方の靴を取り出し、そろえてはいてみると、ぴったりと足に合った。人々がどっとわいた。タールンが姉だと見破り、継母がののしったが、若さまは、彼女が哀れな境遇であるときいてむしろ同情し、二人に恋がめばえて結ばれる。

結婚一年後、子供が生まれ、三年ぶりに里帰りする。妹は彼女を渕までさそい出し、つき落としてしまう。継母は妹に姉が持参した服を着せて帰してやる。おかしいと夫が問いただすと食物のせいだといい、子供が母は色白だったのに、なぜあばたになったかと問えば、実家でなべの油がはねたためだと答える。

夫が悩んでいるとカラスが、美人の妻があばたにとりかえられたと鳴く。カラスが妻の魂の変わったものなら、袖の中へ入れというと、カラスはとびこむ。家の鳥かごで飼う。夫は、ものぐさなタールンに、里帰りの前に織りかけた壮錦の続きを織るようにいう。タールンは織れない。カラスが必ず仇は討つと鳴く。タールンはかっとしてカラス

を殺す。それでも足りず、毛を抜き、肉を切ってナベで煮る。ぐっぐっと煮立つ音がまた、タールンには人殺し、いまにおまえも煮られるぞと聞こえる。タールンは窓から外へ、煮ていた中身を捨てる。そのカラス汁のすてられたところに、一群の翠竹が生える。タールンが来ると、いきなり彼女の髪の毛をひっかける。彼女は怒って全部の竹を切り、燃やしてしまう。

ある老婆が火吹き竹を探しにやってきて、焼けこげた中から、ひと筋の竹を見つけだし持って帰る。老婆が留守の時、火吹き竹の中から美女が現れ、料理をつくる。老婆は美女に自分の娘になってくれと頼む。ある時、猫を追って、タールカの子供と夫が老婆の家の門口に来る。そこになつかしい妻を見出し、父子はうれし涙にくれる。

タールンは姉のように白く美しくなりたいと、姉に聞くと、もみをつくと米が次第に白くなるように、自分もそうして白くなったと教えた。タールンは実家の母に頼んで、穀物をつく臼の下に横たわり、ついてくれと母にせがむ。母の踏んだきねが、彼女の腹に落ちて死ぬ。母もそれを見て死んでしまう。

この「達架・達侖」の話は、広西、雲南の壮族の聚居地に普遍的に流伝しており、壮族なら幼児に至るまで知らぬ者のないといわれるほど有名な故事(2)であるという。話の内容には地域や時代によってもさまざまな変化があるのは当然であり、筆者の聞き書きと内容的に共通する藍鴻恩氏の「達架の故事」(3)を初め、先に筆者が訳出紹介した(4)「達嫁達侖(ターカタールン)」(徐宏捜集整理)、「達嫁(ターカ)と達倪(ターニイ)」(黄紹清、黄革捜集整理)(5)、「達加(ターカ)」(覃建真捜集整理)(6)等が報告されている。これらの話の細部にわたるモティーフの相違はさておき、先ず唐代に記された「酉陽雑俎」中の葉限の物語の語り手、ならびに伝承地について検討を加えたい。

「酉陽雑俎」の著者段成式は山東の人だが、唐末に嶺南の地へ吉州刺史として赴いている。その時の使用人に「李士

元」なる者がおり、「多記得南中怪事」つまり南中の不思議な話を多く記憶していたという。語り手の名まで付しているのは、この記録の資料的価値を裏づけるものとして、最近中国の研究者間でも注目されている。(7)更に興味あることは、語り手李士元の出身が「邕州洞中の人」であることだ。唐代の邕州とは、『讀史方與紀要』によれば左の如く記してある。

「古、百粵の地、桂林郡に属す。漢、蠻林郡に属す。唐、武徳四年南晋州を置き、貞観六年改めて邕州と曰う。元には邕州路と曰い、のち南寧路と改め、路を改めて府と為す」(8)

つまり、明初から清までは南寧府であり、その後、民国の初めに南寧県と改名した。唐代の邕州というのは、現在の南寧を中心に武鳴、上思、崇左、大新等の県を管轄する地域を指すのである。

では九世紀にすでにこの南寧一帯で「シンデレラ」を語り伝えていた人びとは、そも何者であろうか、今の何族にあたるのであろうか。先ずは「酉陽雑俎」記載の故事の梗概を記そう。

南人の伝えるところによると、秦、漢以前に洞主の呉氏という人がおり、土人は呉洞と呼んだ。両妻を娶ったが一妻が死に葉限という娘が残され、また呉氏も死ぬ。葉限は継母に苦しめられ、きこりや水くみに使われていたが、ある時金の眼の小魚を得たので盆の中で養ったが、日々大きくなり、池で飼う。娘が池に行くと魚は必ず岸辺に首を出す、他の人では出てこない。継母は娘の着物を借りて池に行き、刃を袖にして魚を呼び、首を出したところを切り殺す。魚は丈余に育ち、その肉は美味であった。又、その骨を肥の下に隠した。その後、娘は池に向かったが魚が出てこないので泣いていると、被髪粗衣の人が天から降りて彼女を慰め、「魚の骨が肥の下にあるからそれを取って隠し、ほしい物をその骨に祈ればかなえられる。」と言う。ためしてみるとそのとおり食物や衣裳が出る。「洞」の祭りに継母と実子が出かけたあと、娘は翠紡の上衣に金の履をはいて祭りに行く。継母とその実子が姉ではないかと疑ったた

め娘はあわてて帰る。履を片方残し、洞人に拾われる。其の洞、海島に隣しており、島中の陀汗国に売る。履は国王の手にはいる。国中の者にはかせたが合うものがいない。その履の軽きこと毛の如く、石を踏んでも音をたてない。王はようやくにして葉限をさがしあて、はかせてみるとぴたりあった。彼女が翠紡の衣をつけ履をはくと天人のようであった。葉限は魚の骨と共に陀汗国にともなわれ、国王の妻となった。継母と妹は飛石に打たれて死ぬ。

この話は成式の使用人李士元が話したものである、士元はもと邕州洞中の人、多く南中の怪事を覚えていた(9)。

冒頭の「南人相伝、秦漢前有洞主呉氏土人呼為呉洞」について、手がかりを見出すとすれば、話の舞台が、「呉洞」であるということだ。秦漢前という時代設定は、この場合厳密な意味ではなく、「昔々」ほどのニュアンスでよいと思う。なぜなら、「洞」は「峒」ともいい、唐宋時代に行われた羈縻(きび)州に於ける行政単位であるからである。

唐朝は従来の嶺南道を分けて、嶺南西道を置き、五府経略使を広州に設けて五管に分った。東部地区においては、州県を画し、官吏を置き、征貢賦の制度を実行し、直接統治を進行した。それに対して西部山区は五十余の羈縻州県をおき、その地区の民族の首領を都督、刺史として間接統治を行い(10)、経済上の独立性をもたせたのである。

その組織は、宋の范成大の著した『桂海虞衡志』によれば

「因其疆域、參唐制、分析其種落、大者為州、小者為県、又小者為峒、凡五十余所。推其雄長者首領、籍其民為壮丁。(11)」

となっている。つまり洞というのは非漢民族に対する唐朝の羈縻政策下における組織の最下位の単位である。『酉陽雑俎』中に語られたシンデレラの父親の呉氏は洞主であるから、漢族でないことは明らかである。

しからばその呉洞は、現在のどの地方に当たるであろうか。この点について、藍鴻恩氏が興味ある説を述べている。

即ち『唐書　西原蛮伝』に

「粛宗至徳元年、西原蛮黄乾曜叛、入寇。乾元二年、黄乾曜等伏誅、余衆呉功曹復叛。」

とあり、

「西原蛮酋長呉功曹復合兵内寇道州、據城五十余日。」

とある。当時は酋長の姓氏をもって洞名としているのが常であるから、呉功曹は呉洞の洞主と考えられる。例えば、唐朝で有名な黄乾曜は黄洞の酋長、宋朝の儂志高は儂洞の酋長である。故に洞主が呉氏であるなら、呉洞と呼ばれるのは当然である。

この呉洞が西原蛮酋長とあるからには、西原蛮の統轄する範囲に属していることになる。

西原蛮の地域はどこか、「南寧府志」（宣統元年本）巻五によれば、

「新寧州。西原州在域西南……又有黄洞、一名黄橙洞、在域西、其蛮為黄氏……」

新寧州は現在の広西扶綏県。この一帯は現在にいたるもまだ壮族の聚居区である。してみると「酉陽雑俎」記載のこの故事は、壮族の民間故事であること疑いない(12)。

この推理は誠に興味深い。時代は降るが、太平天国で勇名をはせた呉凌雲も、壮族であり、出身も新寧州、今の扶綏県である(13)。

壮族の先民に姓氏が出現したのは、隋唐の頃で、例えば高州の馮氏・涼州の洗氏・欽州の寧氏などあるが、特にここで問題にしている地域についていえば、桂西一帯の黄洞黄氏、濃洞濃氏、呉洞呉氏などいずれも著名な大姓であった(14)。先にもふれたが、酋長（洞主）の姓を以て洞名とするところから察するに、この姓氏と氏族とは深い関係がある(15)らし

い。

いずれにしても、唐代に記録された酉陽雑俎のこの物語が、壮族の先氏の伝承であるという條件はかなり揃っているようである。

それでは、唐代に呉氏や、儂氏や黄氏などと呼ばれたこの地域の部族が、どのような歴史的変遷を経て、今日、壮族と呼ばれるようになったのであろうか。

古代、嶺南地区に広く分布する民族は「百越」と呼ばれた。多くの越という意味である。その中の広西北部地区（現在の）を「西甌越」、西南地区を「駱越」といったが、地理的分布からみると、この西甌と駱越が、今日の壮族の先祖と考えられる(16)。

その後、「烏滸」「俚」「僚」などの名称が史書に見られるが、やがて南宋に至って、「僮」又は「撞」という文字があらわれてくる。

即ち、南宋の范成大「桂海虞衡志」に、「慶遠、南丹溪洞之人呼曰僮」とあり、又朱輔の「溪蛮叢笑」に、「五溪蛮種有五。曰苗、曰傜、曰僚、曰僮曰仡佬」とある(17)。更に、李曽伯の奏議の中に、慶遠の地に「撞丁有り」と記してある。これをみると、当時は一部の地域で「僮」と呼ばれていたものが元明の間にひろまり、明末以後、各地土著部族の各種不同の称呼が次第に統一され、広西一帯を広範囲に「僮族（チワン）」と称されるようになった(18)。其の後、同音の「壮（チワン）」に改めたのである。

このような民族の成り立ちと歴史を考えるとき、壮族に多くの自称のあることが、如何に重要な意味をもつかに思い至った。

民族事務委員会の蒙家麟主席の話によると、壮族には大きく分けて、二つの方言（南部、北部）と九つの土語がある。自称に至っては、「布壮、布儂、布越、布土、布曼、布傣」等二十余種もあるということである。

さて、こうして民族の歴史の推移は、民間伝承にも自ら反映する。壮族のシンデレラ「ターカ」を迎える人物は、洞主、もしくは「洞主の若様」から、壮語の「土」（土司官の意）、または「学」（流官の意）それに「秀才」等が登場するが、それは次のような政治制度を反映しているのである。

再び藍鴻恩氏の話を記すと、唐代以降、羈縻州であったものが、明以後には、この地区の制度を大改革し、土司制度を立てた。したがって最高層の人物は、「洞主」から「土司官」となった。清朝になると改土帰流が執行され、土司官は凋落し、「流官」の権力が増大する。その後、壮族地区にも科挙制度が行われるようになり、「秀才」が才能や地位のある人物の代表となったのである。話の中の人物が右の様な流れを反映しているのは、この故事が古くから流伝していた証明になる(19)という。

二、周辺諸民族のシンデレラ

ここに注目すべき一つの見解を紹介する。『酉陽雑俎』中に記されたシンデレラの中で、「其洞鄰海島」という表現及びそこに反映された生活内容から見ると、この故事のはじめは沿海の古代壮族聚居地で生まれた可能性がある。この類の故事の発生は、一定の社会的条件が必要であり、それは私有制度の確立であり、家族に財産継承権の問題が存在し、それによって各種の紛争が引き起こされる、そのような条件下にあって生まれた物語である。故にこの故事は秦漢以後に生み出されたものと思う。

この故事はその後、沿海地区から次第に内地に向かって流伝していき、唐代の頃には邕州一帯にまで広まり、以後不断に伝承地域を拡大し、内容的にも豊かに発展をつづけて、ついに壮族地区全体に広く流伝する「達架と達侖」のような長篇の民間故事となったのである。」（『壮族文学史』第二編第九章「達架と達侖」三四四頁―三四九頁）と。『酉陽雑俎』中の故事と、「ターカ・タールン」の間にはかなりの相違点が見うけられるが、この点に関しては、

「いくつかのモティーフを除いては、未だ原伝説、つまり酉陽雑俎の痕迹をとどめているが、其の余はすべて新しく実生活から題材をとり創造されたものである。」としている。ではこの現在流伝の「ターカ・タールン」はいつ頃形成されたのであろうか、という疑問に対しては、

「すくなくとも宋代以前であろう」という。なぜなら「原伝説がすでに民間で失われて新故事が盛んになり、広泛に流伝し、影響も大きく、壮族民間故事中、屈指に数えられるというのは、もしもその形成が早くなければ、歴代壮族地区のこのような交通不便の環境条件下に於いて、口頭によって流伝し、かくも普遍的に人心に深入し、且つそのストウリーが基本的には一致（小さな相異はあるが）することなど不可能なことである。」といい、「ターカ・タールン」の原伝説（「酉陽雑俎」中の記載）は早い時代に四方に伝播し、国内のみならず国外にも流伝するに至った。」というのである。つまりドイツのグリムを始めヨーロッパのシンデレラのすべてを射程距離に入れての発言である。

汎世界的に伝承する物語の発生を推断することはきわめて困難なことであるが、歴史的に古い記録の存在するのは事実であり、又、壮族に広くこの物語が伝承されていることも事実である。しかしまた周辺諸民族に眼を転ずれば、そこには実に多くの民族の間にシンデレラの伝承をみるのである。（今回はヴェトナム以外は中国のみに限定する。）ベトナム、傣（タイ）、侗（トン）、水（スイ）、毛南（マオナン）、布依（ブイ）、苗（ミャオ）、瑶（ヤオ）、黎（リー）、蔵（チベット）、彝（イ）、白（ペー）、怒（ヌー）、傈僳（リスー）、羌（チャン）、納西（ナシ）、朝鮮、錫伯（シボ）、達斡爾（タフール）、漢、回、維吾爾（ウイグル）、

哈薩克(カザフ)等。

実に数十話を数えることができるのである。(※)

試みにその中の数編を挙げてみよう。先ず隣接するヴェトナムの「タムとカム」の物語。

昔、タムとカムという姉妹がいた。タムは先妻の子なので働かされていた。ある日二人は袋を渡され小えびを取りに行く。タムは多く取ったが、カムに盗まれる。泣いていると仏が現れ、袋に一匹残っていたハゼを井戸に放ち、毎日飯を与えよと言う。タムはその通りにしていたが、継母に見つかり、ハゼを殺されてしまう。また泣いていると仏が現れ、魚の骨を四つのつぼに入れ、ベッドの四本の足の下に埋めるよう言われ、タムはそうした。その後、継母はタムに水牛番、草刈り、飯炊き、もみつぶし、米搗き等の重労働を課すようになった。

ある日祭りがあり、継母たちは着飾り出かけるが、タムは米ともみをより分けてから行くよう言われる。すると仏が現れ、雀に米ともみを分けさせ、ベッドの下のつぼに服があることを教えてくれる。見ると美しい衣裳や靴、馬までが出てきてタムは祭りにかけつける。途中、ぬかるみで靴をなくすが、国王がそれを見つけ、持ち主を妻にするとおふれを出し、タムは宮殿に迎え入れられる。しかしタムが里帰りした折、登った木を切られ継母に殺され、宮殿には代わりにカムが送られる。

タムの魂はオームに入り、王のもとをいつも飛んだ。カムはこれがタムであり、又、王のかわいがりようを見て、オームを殺すと焼いて猫にやり、羽を埋めた。しばらくして埋めた所から桃の木が生えた。王はこの木を気に入り、いつもそばにいるのでカムは王の留守にこれを切って機を作った。すると機から声が聞こえるので燃やして灰を遠くに捨てた。捨てた所からティの木が生え、その実は茶店の老婆にかわいがられた。老婆の留守にティの実はタムに戻

り家事をしていたが、老婆に見つかり、人間に戻って二人で暮らし始める。

ある時、王がこの茶店に立ち寄り二人は再会した。タムが宮殿に戻ると、タムは前より美しくなった姉を見て、どうしてこんなに白くなったのかと聞く。タムは教えてあげると言ってカムを穴に入れ、頭から熱湯を注いで、殺すと、死体を塩辛にして継母に送った。継母はこれを食べ、最後に自分の娘の肉だと知って死んでしまう(20)。

この「タムとカム」はヴェトナムの代表的な民間故事として有名であるが、話の構成は西陽雑俎の「葉限」よりも「ターカ・タールン」に近い。しかし魚がタムの援助者になるモティーフは「葉限」に共通している。この魚の登場は、ヨーロッパにあまり無く、このヴェトナムと次に紹介する傣族、(東南アジアのタイ族も)、それにインドネシア等に援助者、もしくは実母そのものが魚となって現れる場合もある。次にあげるのは、シーサンパンナの傣族に伝承する話である。

昔、ある村に二人の妻をもつ人がいた。妻たちにはそれぞれ帕算(パーソワン)、帕喊(パーハン)という娘がいた。ある日パーソワンの母親が水死した。彼女が池をのぞくと、大きな金の魚が泳いでいるので、神に、これが母なら池のほとりに来て、違うなら深みの方に行くよう祈った。果して魚は池のほとりに来た。それから毎日、彼女は御飯をもって魚に与えた。

継母はこのことを知ると、魚をつかまえパーソワンに煮させた。母親は「私が死んだら、お前は私の肉を食べずに骨を集め、それを池のほとりに埋め、又、枕の下にある黒い頭巾を隠すよう遺言した。継母と妹は魚を食べたが彼女は食べず、骨を集め、かめに入れて埋めた。そして頭巾を隠した。七日目の晩、彼女は池のほとりに行き、母親を祀った。数年後骨を埋めた所から檀香樹が生え、高く伸びていった。

この国に王子がいた。彼は善良聡明で樹木を愛した。ある日、この檀香樹の話を聞きつけた。多くの人が王宮に植えかえようと試みたが抜けない。パーソワンは母親の話を思い出した。黒い頭巾を木に縛りつけて引っぱると抜けた。

王子は彼女に近寄り、二人はやがて愛し合うようになり、結婚した。

一年後、パーソワンは里帰りをする。継母と妹は彼女を池に突き落して殺す。妹は姉の衣裳をまとい王宮に戻る。王子は彼女を怪しむが妹は何かと言い逃れた。

パーソワンは死後美しいインコに生れ変り、王宮に飛んでいっては「パーハンがだましている。」と叫ぶ。パーハンはインコを打ち殺し、花園に捨てた。そこから梨の木が生え、梨は王子が食べると甘く、パーハンが食べると酸っぱい。彼女はそれ切ると、洗濯棒にする分だけ残して焼いた。その棒を使うと王子の服はきれいになり、彼女のものはボロボロに破れてしまう。パーハンはまた怒り、それを川に流した。棒は流され、老婆に拾われた。真夜中になると、棒は若い女性に変わった。この老夫婦には子供がなかったので、彼女を娘にした。

ある日、王子が狩りに来て腹がすき、一軒の家でもてなされる。その御飯が特においしかったので、誰が作ったのかと尋ねたところ、自分の妻であることが分かり、二人は再会し王宮に帰っていった。一方、妹は逃げ出して池に入水し、継母も続いて投水した(21)。

『酉陽雑俎』の葉限にみられる魚モティーフは中国に於いては傣族に見られるのみで、あとの多くは牝牛である。隣接する海南島リー族の場合も、奥桃堆(アオタオトエ)というみなし子が兄嫁に虐待され、精根尽き果てた時、世話をしていた牛がすべてを助けてくれて、やがて牛は殺され、その骨が美しい衣裳に変わって、王子に見そめられる話(22)である。

次に、壮、傣、リーと同じ壮侗語族に属する侗族の話を簡単に紹介する。

遂美(スイメイ)の母は黒い牛になり、父が後妻をもらう。後妻はあばたの妹を連れてくる。継母に四斤の糸を紡がねば食事を与えないと言われ、黒牛の助けで毎日四斤の麻糸を紡ぐ。あやしんだ継母が妹に見張らせ、牛が糸をひるのを知る。

父の誕生日、黒牛を殺し宴を開く。黒牛は遂美に、死後、自分の肉を食べるな、骨と皮を残しておけと遺言する。

其の後、困ったことがあると牛の骨が教えてくれて、その通りにして川の中の金の指輪を拾いあげる。すると美しい衣裳、髪飾りをつけた姿に変わり、竜王子の妃になる。

里帰りして妹に井戸につき落とされるが、竜王子に救われる[23]。

この話は貴州省の黎平地区に伝承しており、黎平桂花台茶で採集したものである。

以上は壮、侗、傣語族の伝承を紹介したが、この他にも侗族に「帰乙山上的卑化」、傣族に「芒果姑娘」「金亀与葉弄」「金鯉魚」、布依族に「習佳」等がある。

次はチベット族、彝族、哈尼族、白族など、チベット・ビルマ語系語族の伝承をあげる。先ずチベットの例から。

奴隷のヨンシーは主人たちにいじめられながらも、亡き母の生まれ変わりの牛に助けられ暮らしている。ある時、牛は殺されるが、その前夜ヨンシーに、自分の皮、角、ひずめ、腸をかくしておけ、困った時に役立つからと遺言しておく。

ヨンシーが十六になり、この国の王子が妃選びのため娘たちに集まるよう布告する。女主人は地面にカブの種をまいて、それをすべて拾うよう言いつけて出ていくが、雀たちがこれを果たしてくれる。牛の言葉を思い出してヨンシーが牛の皮などを取り出すと、皮は衣裳に、角は帽子に、ひずめは靴に、腸は前掛けに変わった。

王子はヨンシーを見染め、求婚するが、女主人が邪魔をする。見かねた国王が宝の靴を示し、この靴に合う者を妃にすると宣言。靴はヨンシーにぴったり合い、ヨンシーは妃になり幸せに暮らした[24]。

これは沢汪仁増の採集整理によるチベット族の伝承だが、貴州省の西北、雲南、四川に隣接する威寧の彝族にも

「阿諾楚（アマオチュ）と阿諾詬（ゴウ）」という物語が伝承している。

姉のアヌオチュは継母にこきつかわれるが、牛（実母が姿を変えている）に助けられ、やがて牛は殺されるが、その骨を井戸端に埋めよと遺言する。やがて母親の骨はカラスに姿を変え、自分（母）の部屋を掘れと教える。そこから、馬や衣裳や首飾りが現れる。それを着て大家の妻選びの宴に行き、妻に選ばれる。後半は里帰りして妹に殺され、鳥になり、殺されてハサミになり夫に出会う。妹や継母は死ぬ(25)。

次は雲南省に住む哈尼族の伝承で、李竜梭口述のもの。

ある男に二人の妻がいて、それぞれに阿翠（アスイ）、阿痴（アチ）という娘がいた。アスイは聡明で美しく、アチは醜く愚かであった。ある時アスイの母親はアチの母親に池に突き落とされて溺死し、水牛となる。アスイはその水牛をひいて家に帰る。

その後、継母はアスイを虐待した。アスイは一日中働いたが、とてもできず泣いていると、水牛は替わりにやってくれた。アチはこれを見て自分も試してみたが、牛に指をかみ切られた。継母は怒り、六月年の祭りの日に水牛を殺すと言った。アスイが水牛に知らせると水牛は、私が殺されたら、お前は私の肉を食べず、骨を拾い集めて叔父の家の鶏小屋に隠し、三日後にそれを開けるように言う。やがて祭りの日がきて水牛は殺された。アスイは言われた通りにして、三日後開けると一羽のカラスが飛び出した。ある日、継母はアスイに底の抜けた竹筒で川の水をくみにやらせたが、カラスのおかげで竹筒の底をふさぎ、水をくむことができた。継母がいじわるをする度、カラスが助けてくれた。

またある日、継母と妹は着飾って祭りに出かけた。アスイは家の仕事を言いつけられた。カラスが叔父の箱を開け

てみよ、と鳴くので開けてみると中から美しい衣裳や靴が出てきた。金持ちの息子に見染められ結婚する。

里帰りの折、継母たちに殺される。鶴、紅毛樹、はさみにと転生し、人間に戻り夫と再会する。帰宅後、妹を殺し、継母も死ぬ(26)。

次は雲南省洱海のほとりに居住する白族の伝承である。

腊妹（ラーメイ）という娘がおり、その母が牛になってしまったので、父は後妻をめとる。後妻は娘を連れていた。父の死後、彼女らはラーメイにつらくあたる。ある日牛は困っていたラーメイを助け、継母たちに逆らったため殺される。ラーメイはその骨を裏庭に埋め、そこから牛膝草が生える。

六月十五日の白竜王会の日、継母と妹は出かけ、ラーメイは水がめを一杯にし、黒白混ざった豆を分けるよう言いつけられるが、雀に助けられる。又、牛の骨を埋めた牛膝草の草むらに衣裳、スカート、帽子、靴を見つけ、祭りに出かける。ラーメイは人ごみで靴をなくすが、狩人に拾われ、二人は結婚する。

里帰りの際、ラーメイは殺され、妹が彼女になりすます。死んだラーメイははさみに変わり、隣の老婆の手に渡る。人間に戻ったラーメイは夫を食事に招いて再会し、継母たちは罰せられる(27)。

以上、チベット・ビルマ語系語族に伝承するシンデレラをあげたが、このほかにも彝族の「阿茨姑娘（アーツー）」「阿伊処（アーイーチュ）と阿伊苛（アーイーコウ）」「嫻諾（シャンヌオ）と阿朗（アーラン）」「牧牛姑娘阿依（アーイー）」、哈尼族の「牛丕（ニュウピー）牛尼（ニュウニ）阿媽（アーマー）」等がある。

シンデレラはこのほか、貴州省西部及び西北部の苗族に「谷瑙谷婷（クウナオクウテイン）」、貴州省松桃、湖南省湘西の苗族には、「両姉妹」等がある。次は貴州省西北部、威寧県馬場郷で、馬学明が語り、韓紹綱が記録した「欧楽（オウルオ）と召納（チャオナー）」である。

昔、欧楽（オウルオ）という娘がいて、母親は彼女が幼い頃に亡くなった。父親は後妻を迎え、欧豆（オウトウ）という妹が生まれた。父親

が死ぬと継母は欧豆をかわいがり、欧楽を虐待した。

ある年、結婚相手を捜すための跳花場の祭りが開かれることになったが、貧しい身なりの欧楽は出かけることもできずに悲嘆にくれていると、村の老婆がきて、美しい衣裳と銀の首飾りを用意してくれる。

祭りの日、欧楽のあまりの美しさに嫉妬した欧豆は、母親に言いつけようとする。そこへ蘆笙の名手でりりしい若者の召納が近よって欧楽に求婚する。欧楽は自分の身の上を話してかたく断わるが、ついに承諾する。三人が家に帰ると継母は召納を欧豆の恋人と思い込む。その夜、継母は新婚夫婦の為の床を整える。召納はこれを見抜き、炉の火を守っていた欧楽のそばで夜を明かすことにする。欧豆が召納を誘いにくるがはぐらかされ、そのまま寝入ってしまう。欧楽は欧豆と着物を取り換え、二人は逃げる。

翌朝、継母はそうと知らず、欧豆に仕事を言いつけるが、口ごたえをするので欧豆に熱した蠟をかける。そこでやっと自分の娘であることに気づく(28)。

苗族の事例は、壮族の話に比すれば、モティーフの構成が後半やや異なっている。このほか東北地方にも広く伝承しているので、次は新疆察布査尔錫伯自治区に居住する錫伯族の伝承「伊尔忍姑娘」を紹介する。

伊尔忍(イルガ)の父は妻が死ぬと後妻を迎え、後妻には娘がいた。父は徴兵にとられ、継母はイルガを虐待する。食事もろくに与えられなかったイルガをみて、飼っていた黒牛は毎日イルガに食事を与える。それを継母たちに知られ、妹も試すが牛が逆らったため牛は殺される。牛は、自分が死んだら煙筒の下に骨を埋め、八月十五日の晩に掘るよう遺言する。

八月十五日の晩、掘ってみると髪飾りや衣裳が出てくる。翌日イルガは祭りに行くが、妹がこれを妬み、継母とた

くらみ殺す。

父が戻ってくる。イルガの転生した百霊鳥は彼に飼われるが母娘にスープにされる。継母がそれをかまどに捨てると赤い玉になり、隣の老婆に拾われ、百日後人間に戻る。イルガは自分の家の者を食事に招待し、姿を現す。事が知られ、母娘は家を追い出される。イルガは三人の老人と共に暮らす(29)。

又、黒竜江省に住む、ダフール族にも次のような話がある。流伝地区は莫力達瓦達斡尓族自治旗である。

孤児の姉妹がいる。空家で、姉は緑色のエンドウを、妹は紅のエンドウを食べそれぞれ女の子を産む。妹は娘の莎佳(シャチャ)を残し死ぬ。以後、伯母にいじめられる。伯母は実子の宝布(パオプー)を連れ婚礼に行く。莎佳には一斗のソバと麦を分けてから行けという。泣いていると老婆が現れる。裏のポプラの根元のうろに服や鞋が入っていると教える。莎佳はそれを身につけ婚礼に行く。帰る途中、片方の鞋を失す。帰ると老婆の姿はなくソバとムギは分かれている。布楽托(プラトオ)という狩人が鞋を拾う。鞋の持ち主を妻にしようと探す。伯母の家へやってくる。伯母は宝布に鞋をはかせるが合わない。莎佳がはくと合う。二人は結婚し、男の子が生まれる。

翌年、伯母と宝布が夫の留守中にやってくる。伯母は莎佳をだまして井戸へつき落とす。夫が帰ってくる。姉になりすました宝布が出むかえる。馬を降りようとすると、馬が前足をあげ降ろさせない。馬が妻が井戸に落とされたことを教える。夫は妻を救いに行く。井戸のところへくると馬は三度ころがる。すると馬の尾が三丈にものびる。莎佳はそれを伝って助けあげられる。莎佳が帰ってくるのを見て伯母は娘をつれて逃げ出す。逃げる途中、二人はオオカミに食べられる(30)。

次には黒竜江省延辺の朝鮮族に伝わる「コンジとパッジ」である。この話は朝鮮族にはかなりポピュラーに伝承して

おり、朝鮮半島でも有名な伝承である。

孔姫（コンジ）の父は妻をなくし、後妻をもらい、女の子（葩姫（パッジ））をもうける。父が死ぬと継母はコンジをいじめだす。継母はコンジに難題をふっかけるが、黒い大牛や金の蛙に助けられ無事に果たす。

中秋節、継母とパッジは出かけ、コンジには大ざる三杯の糸を織り、三囤の穀物をつくよう言いつける。仙女が降りてきて彼女を助け、美しい服や靴までもらう。コンジは祭りに行き、靴を片方落とすが、若い領主の目にとまり、結婚する。

継母は領主の留守にコンジを殺し、パッジを身がわりにする。コンジは蓮の花、夜明珠と転生し、料理女に拾われる。女はコンジの頼みどおり酒席を用意し、領主を招く。そこへ亡霊のコンジが現れ、遺体に仙丹を飲ませるよう言い、生きかえる。母娘はとらえられ、コンジは領主と幸せに暮らす(31)。

シンデレラは又、漢族にも伝承している。

香菱（シャンリン）という娘、母が亡くなり、父は母牛の乳で育てる。母牛は、〝牛奶娘〟と呼ばれる。父は再婚し、頭生という弟が生まれる。娘は放牛し、夜も牛と寝る。継母は娘に放牛しながら麻を剥げと言いつける。更に糸にせよと言いつける。いずれも牛がやってくれる。継母は牛を殺す。娘は牛骨を瓮に入れて牛小屋に隠す。娘は十八歳で美しく成長する。嫁に行かされるのを心配すると、瓮の中に藍い服が現れる。着ると醜くなる。村祭りに娘は留守番をして、戸口から外を見る。雷順という隣村の孤児の若者が気づき、求婚する。父も継母も承知する。花轎に乗る時、継母は少しましな服を着せようと服を引き、破ける。以前より美しい娘となって、嫁入る。人々、美しい花嫁に驚く。

三日後、娘は夫と里帰りをする。父は貧しい娘のために何でも持って行けと言う。娘は藍い服がほしいと言う。継

母が持って来る服は数本の牛骨に変じる。娘が思わず「牛奶娘」と叫ぶ。骨は銀貨に変じる(32)。漢族にはこのほか、「翠児と蓮児(スイアール リイエンアール)」「翠妹と蓮妹(スイメイ リイエンメイ)」等の伝承がある。

三、シンデレラと重葬文化

ヨーロッパやアジアの広範囲に分布する「シンデレラ」については、従来も多くの研究があるし、またさまざまな角度から論じることは可能である。そこで筆者は、今回とりあげた中国を中心とするアジアの資料にもとずき、そこに顕著にみられる特徴的なひとつの問題に焦点をあててみたい。

それはこの物語のヒロインを、絶えず援助し、華麗なる衣裳や靴を出現させ、幸運に導くものが、魚や牝牛であり、その死体ではなく、その「骨を埋め」「骨に祈り」「骨に願いをかなえてもらう」ことである。壮族のターカは芭蕉の根下、牛の骨を埋めたところから、緑色の美しい衣裳や靴が出現し、彝族の例では牛になった母が、骨を井戸端に埋めよと遺言し、その骨によって救われ、白族のラーメイは牛の骨を埋めた草むらから美しい衣裳や靴があらわれ、ハニ族のアスイは水牛の骨をかくしておき願いがかない幸せになる等々。

この骨モティーフは、ヨーロッパのシンデレラにはあまり見られぬもので東アジアに特徴的に現れてくるモティーフである。しかもこの魚や牝牛は、単なる援助者ではなく、亡母の霊魂である場合や、更には母親がそのまま牛に変身する例も少なからず見られる。

例えば傣族の例では、水死した母親が金の魚になり、その骨を池のほとりに埋めよといい、侗族の母親は黒い牛に変わり、白族では草を食べた母が耕牛に変身し、ハニ族では溺死した母が水牛になりその骨が娘を助ける等々。つまり、

母親の骨そのものが娘を守り、娘に幸せをもたらすと解釈できるのである。

死骸を埋めたところから植物が生える、というモティーフは他にも見られるが、ここではすでに「骨」になったものを、拾い集めて、再び埋めるのである。壮族の例のように、瓷に入れて埋めるのもあれば、チベット族のようにかくしておく話もある。中には海南島黎族のシンデレラの如く、洗骨かと思われる話さえ存在する。即ち、愛する牛を殺されたヒロインが、牛の遺言通りに、捨てられた牛の骨を拾い、かくしておくが、河へ沐浴に持って行く。骨をきれいにして河辺の沙場にならべて干し、河に入って沐浴をはじめると、不思議や骨もまた河水に跳びこみ、またたく間に、金の腕輪や耳輪や、ネックレスや美しい衣裳や帽子に変わって、彼女の上に幸運をもたらし、対抗者の弾圧にあうが、遂には王子（黎族畝頭の息子）と結婚する(33)。

以上のように見てくると、この骨に対する独特の観察の仕方は、実生活の上でも骨を崇拝し骨を祀る人々の習俗が反映されているのではなかろうか。このことは南方熊楠氏(34)も言及しているが、筆者が直接壮族の集落である、武鳴の李村をたずねた時の聞き書きによれば、その地で重葬が行われていることは明らかであった。即ち人が死ぬと土葬にし、三年後に骨を拾い出す。その際、骨についているもろもろの物を丁寧にそぎ落とし、ひとつづつ缸に入れ、再び風水の良い地方へ埋葬する。

筆者の見聞を、其の後に出された報告(35)によって補うと次のようになる。壮族の間に行われる二次葬は俗に揀骨葬と呼ばれている。この揀骨葬は一般に三段階をとり、第一段階は寄土、第二は揀骨、第三は埋骨と呼ばれている。その方法を簡単に(36)述べれば、

先ず死者を木棺に納める。この時の棺材はあらかじめ生前に準備しておく。その材質は三、四年耐えられる程度の薄

いものでよい。陪葬の寿服は一般に三、四枚の単衣で、すべて死体に着せる。それから死者に一足の新しい布鞋（布靴）をはかせる。（一般には特別につくるもので、さほど頑丈でなくともよい）もし父母、或は祖父母が未だ在世の場合は、その死者には更に一足の草靴を外側にかぶせる。あわせて一枚の銀元をその口中に入れ、貧者は銅元を代わりにするが、名づけて「含金」という。

埋葬はきわめて浅く、棺の面から地表まで一、二尺しかない。ある場合は棺蓋が地表以上に出ており、その上に土または草皮泥をかけ、長方形の墓にもり上げる。浅くする目的は屍体の腐朽を促すためである。寄土の後、三年或は五年後に揀骨を行う。（あらかじめ骨を入れる陶瓷を用意する。高さ二尺、直径一尺、上下の端がほぼ小さく、上に鉢型の蓋がある。）棺蓋を開けてみて、死体が已に腐朽していれば揀骨を開始する。

先ず頭骨がとり出され、その後腐りきれずにはりついている衣服の布きれをはがし去り、骸骨を一つ一つと揀い出す。木の枝や、木片の類の物を用いて、骨にはりついている腐肉をけずりおとし、稲草や綿紙、碎布等で骨をきれいに拭い去る。山上では一般に水が無いので水で洗うことはしない。そしてから陶瓷（金罐）の中に先ず下肢から上肢と順に納めて、家族の墓地の本人の場所に埋葬し、饅頭形に土をもり墓とする。これを「埋骨」という。この場合、岩洞内に安置することもあれば、風水の良い場所に埋葬するところもある。こうして遺骨を永久に保存するのである。当地の人々はこの二次葬を大葬としており、二次葬の儀礼は初葬よりも隆重に行う。何故なら初葬は遺体を腐爛させるためであるが、二次葬の方は身内の骨骸を永久に保存することを目的として行うからである(37)。

このような二次葬、あるいは重葬の習俗については、藍鴻恩氏も次のように報告している。

死者を埋葬してから三年の後、「揀筋」を行う。「揀筋」とは死者の棺を開き、骨を揀いあげ、別の「筋罎」（金罎）の

中に入れることである。その後、好い竜脈の地をさがしてから再び埋葬する。こうして死者は一般の祖宗の神霊と同じになるのである(38)。と。

最近、広西壮族の調査報告が出され、その中に田東県と東蘭県の重葬の事例が報告されている。

『広西壮族社会歴史調査』(39)によると田東県檀楽郷では、解放以前、この地の壮族は二度喪葬を行い、一度目は木棺で埋め、三年後掘り出して再びかめに納骨し埋葬した。一度目の喪葬では墓は長方形に盛られ、二度目の喪葬では円形に盛られ、これにより区別する。その喪葬過程は、まず遺体を沐浴し、頭を剃り、衣を換えてその口の中、目の上、手の内にそれぞれ銅銭を一枚ずつ置く。その後白布で死体を包み、縫いつけ、納棺する。納棺後、通常家に一夜安置し、道公五、六人に読経してもらい済度する。翌日埋葬であるが、金持ちの家では二日二晩安置し、道公六、七人に読経してもらってから埋葬する。二度目の喪葬の時、通常道公一人に読経してもらい、埋葬する。金持ちの家では多い時では五、六人の道公に読経してもらい埋葬する。墓穴は普通、地勢のより高い所を選び、棺やかめが沈むのを防ぐ。喪葬があると、親戚、友人は香、燭、爆竹、紙銭を供え、貧しい家には銭や米で援助する。

また、東蘭県那烈郷では、以前、喪葬が二種あった。一つは大葬と言って、棺を埋め、土を盛って墓を造ると二度と動かさないものであり、もう一つは寄土と言って、まず棺を地上に置き、茅ぶき小屋を組み立てて棺に蓋をして墓にし、三年もしくは五年後、骨だけになったのを確認してからきれいに拭き、金の罎（実際は缸）に納めて、風水先生に良い地を選んでもらい埋葬する。其の後は動かさず、毎年清明節にそれを拝む。と報告している。

また現在、壮族が一般に木棺土葬を行っているのは、長期にわたり漢族の影響を受けたことによるもので、その喪葬習俗は漢族にかなり似かよっている。しかし一部の地区には「揀骨重葬」の習俗があり、人が死して埋葬後、若干年（一

般に三年)、遺骨を揀出し、瓦瓮(金壜と称する)内に入れ、密封して再葬する。大新県などの壮族地区では、土葬にして数年後に骨を揀い瓮に入れて、然る後崖洞の中に葬る。と報告されている(40)。

この崖洞葬は極めて古い習俗であり、懸棺葬と共に古代壮族先民の遺風といわれている。いずれにしても重葬である。

またエバーハルト等が指摘するように『墨子・節葬篇』にも

「楚国南、有炎人国、父母死、刮去皮肉、単葬骨駱、算是老子」(41)

とある。如何に古くからの葬制であるかがわかるが、それが岩葬であれ、懸棺葬であれ、洗骨であれ、このような重葬の方法は壮族の先民の居住地域のみならず、更に広範囲に行われている。エバーハルトによれば、彼が「瑶文化」を論じた中で、

「チベット人には骨を埋葬する二次葬の儀式あるいは骨についての手続きがあるが、瑶にはそのような埋葬はない。複葬や埋骨は、すでに列子(巻五)と墨子(巻二十五)の中で、華南について述べられている。これが、東方に非常に深く浸透しているチベットの風習に由来するものか、それとも「洗骨」の風習に属するものかは、もはや判別出来ない。「洗骨」は二次葬を意味するもので、仮の埋葬の後に骨はもう一度墓から取り出され、清められて、二回目の埋葬をされる。二回目の埋葬では、壺に入れてもよい(この風習は、広東一帯に広がっている)し、あるいはまた、特別な建物での集団葬といった別の形も見られる。「洗骨」と二回目の埋葬は、古い時代には中国南部とその隣接地域の殆ど全域にあったことが実証されている(42)。」

という、凌純聲氏もまた、「洗骨葬」に関する論文(43)の中で、中国各地の事例をあげたのち、次のように述べている。

「其地理分佈、自古至今已知的區域廣及湘、黔、川、康、滇、桂、粤、閩、臺、蘇、吉等十一省及東北沿海一隅的東

沃沮；而在洗骨前的屍葬、有土葬、火葬、樹葬、平台葬、室内葬等法式……。」

と言い、この洗骨葬の地理的分布の広さと多様さを述べている。凌氏のあげた資料を検討すると必ずしも洗骨のみではなく、単に骨を拾って他の容器に入れるものや、洗わずに再び他所に埋葬するものもあり、広く二次葬を指しているようだが、すべてを包括して、洗骨葬と呼ぶのは、個々の特色を見失うおそれがあるのではなかろうか。この場合は斎藤忠氏のように、「再葬、或いは二次葬は一旦遺骸を埋めておき、皮肉が消滅し、骨となってから、これを再び埋葬するのであり、洗骨という風習も、これに該当するが、洗骨は実際にその骨を洗うのである。そしてこれを骨壺に入れ、埋納する。しかし洗わないでこれを焚き、焼けた骨や灰を骨壺に入れたりする方法もある。この場合洗骨という言葉は必ずしも適切ではない。ここには洗骨を含め、再葬という言葉で表現したい」(44)という見解に賛同する。洗骨しないものまで洗骨葬と呼ぶわずらわしさを除けば、凌氏の論文(45)は多くの文献資料を挙げている点で貴重である。その一部を紹介すると、後漢書東沃沮伝に

東沃沮在高句驪蓋馬大山之東、東濱大海、北與挹婁、夫餘、南與濊貊接……其葬作大木椁、長十餘丈、開一頭為戸、新死者先假埋之、令皮肉盡、乃取骨置椁中、家人共皆一椁、刻木為主、随死者為數焉。

とあり、この記録が、中国文献中始めての記載であるとしている。東沃沮の地は、今の吉林省の東南と朝鮮半島の東北の境である。

湖南の例としては、唐、杜佑の『通典』巻一八五に

潭、衡州人蜑取死者骨、小函盛之、置山崖石間。

とあり、また湘西沅江流域の葬俗として、唐、張鷟の『朝野僉載』を引いている。即ち、

五溪蠻、父母死、於村外閣其屍、三年而葬』

貴州の例では、『乾隆貴州通志』巻七を引き

人死葬亦用棺、至年餘卽延親族至墓前、以牲酒致祭、發塚開棺、取枯骨刷洗至白為度。以有包骨、後埋一、二年餘、仍取洗刷、至七次乃止。凡家人有病、則謂祖先骨不潔云。近經嚴禁、惡習漸息。

と記している。清朝官僚の眼にはこの重葬の慣習が、悪習と写ったのであろう。厳禁し漸息むとあるから、以後この地には行われなくなったとみられる。

四川省の例では、『太平寰宇記』巻六七簡州風俗の條に、

獠人、遭喪乃以竹竿懸布其門庭、殯於別所。至其體骸燥、以木函盛置山穴中。李膺記云……此郡獠也。又有夷人與獠類一同；又有獠人與獠夷一同、但名字有異而已。

とあり、僚の習俗としてあげている。僚は現在の少数民族のうち、何族か、諸説あるが未だ明確な解答は出ていない。

雲南省の例では、『道光雲南通志』巻一八二に、

爨蠻、死以豹皮裹屍而焚、葬其骨於山、非骨肉莫知其處。

とある。爨氏もまた古い種族だが、骨を葬る場所が、「骨肉に非ざれば其處知る莫し」とは肉親以外は秘密ということか。次福建の例では

人死数年之後、必須重開墓地拾骸、聞南方民族、亦多有之。（『晋江新誌』）

とあって、南方の民族が、多くこの風習をもっていることを記している。

廣東の例は文献によらず、凌氏自身による廣東恵陽出身者からの聞き書きだが、ここには洗骨について言及されてい

る。

「人が死ぬと先づ土葬を行い、六年たってのち、棺を開けて見る。屍が未だ腐りきっていなければ、其地が不吉のためで、別の場所を擇んで葬る。もし其の屍が已に腐っていれば、洗骨者をたのみ棺を開いて骨を取り、之を洗浄し、甕の中に収める。」

といい、特に興味深いのは次の一條である。

「洗骨の時、親戚友人はすべてこれを見ることは許されない。只死者の女性親族により之を監督する」

というのである。そのあとは、

「骨を収めた甕を先づ家廟の中に置き、夫婦の骨甕は共に一處に置く。其後、家族に能力があれば、期日を擇んで再び之を葬る。」

のである。このほか雲南、西康の羅羅族の間にもこの習俗が見られ、かれらの「作祭」と称される大典中誦する経典のうち、重要な「獻薬供牲經」は、「実は洗骨經というべきもので、洗骨の歩驟及び其の意義を叙述しており、東亜洗骨文化の最も貴重な材料である」としている。

以上は文献上の記載だが、考古学上の発掘調査によっても二次葬、或は重葬の遺址は数多く発見されている。この点に関してはすでに紙数も尽きたので稿を改めることにしたいが広西地区に関する一部の資料のみふれておきたい。

即ち葉濃新氏の論文「从民族学資料看広西地区古越人葬俗」によると

一九七二年七月、西林県普馱粮站で、西漢前期の銅鼓を用いて葬具とした二次葬古墓を発見した(46)。墓から出土した器物は、葬具と随葬品大小共四〇〇余件、数量が多いだけでなく、種類も多く、製作も精致で、特に、死者の遺骨を納

めた葬具は、四面銅鼓を合せてつくられており、内棺外槨も類似して形成されていた。葬制と葬品から、当時の人々が二次葬をいかに重視していたかがわかる(47)。

更に多くの二次葬は、南丹、平果、隆安、靖西、大新、崇左、浚雲境内発見の岩洞葬(48)である。岩洞葬は崖洞葬とも称し、広西地区に多く流行し、しかも基本的には二次葬であり、年代は一般に隋唐から明清に至るまで存在する。一九八六年三月、武鳴覃内郷の芭馬山で新たに早期の岩洞葬が発見されたが、調査によると、この岩洞葬はすべて二次葬であった(49)、という。

更にこの報告は武鳴一帯に極めて興味ある習俗の存在を記している。即ち、長生きした老人が世を去ると、彼の親族はその屍を土に埋める時、死者が生前つけていた玉鐲（玉の腕輪）を半分に切断したあと土中に埋める。三年か五年後に再び骨を拾い二次葬を行う時、年長者が土中に埋めた玉鐲を拾い、家に持ち帰ってもとの通りに修復する。最後に丁重にこの特別意義のある玉鐲を死者の息子や子孫に伝授し佩帯させる、その意は祖先の霊魂が子孫を保佑し、併せて祖先のように長寿であることを願うためである(50)、という。

以上は骨を揀い祀って、その永久の存続をねがい、それによって子孫もまた保佑されると信じて行われる重葬の習俗であるが、この習俗と、民間伝承のシンデレラにみられる、骨を埋め、骨に祈って幸いをもたらせるモティーフとの間に何らかの重要な関わりがあるのではないか、その様な思いのもとに資料をあげたに過ぎない。

考古遺跡は動かぬものであるし、民族の葬制も比較的伝統を守る傾向が強いのに比すれば、民間伝承のたぐいは、民族間の接触交流によっても伝播してゆくもので、かなり流動性があるから、両者を直接結びつけてものを言うことはつつしみたい。しかしながら、例えば壮族のように、伝承の地域と重葬の行われる地域とが、地理的にも歴史的にも極め

て近い関係にある場合、伝承にみられるような、死んで骨になり娘を助けて、次々に再生してゆくという話の基底を流れる霊魂不滅の観念と、重葬によって永遠不滅を信じる人々の観念との間には決して看過することのできない深い関係が存在すると思われる。であるからこそ、本来は二つの伝承[5]であるはずのシンデレラ後日譚的な後半の部分―即ちヒロインがめでたく結婚したのち、再び里帰りして継母と妹に殺され、鳥になり、竹になりして何度も転生したのち、遂にもとの幸せにもどるという、まさしく霊魂不滅の話が容易に結びついていたのではなかろうか。

注

(1) 君島久子「壮族のシンデレラ」『説話伝承の日本・アジア・世界』桜楓社　一九八三年　三三五―三三八頁　この物語は、一九八一年十二月南寧にて藍鴻恩氏と懇談した折、直接同氏の語ったものをもとにして、一九八二年一月に同氏から贈られた藍鴻恩著『広西民間文学散論』(広西人民出版社　一九八一年)中に記された「達架和達命」により補ったものである。

(2) 欧陽若修、周作秋、黄紹清、曽慶全編著『壮族文学史』第一冊　広西人民出版社　一九八六年　三四四頁

(3) 藍鴻恩整理　前掲書

(4) 君島久子「日本の説話と中国の民間伝承―竹取、浦島、蟻通、姥皮、シンデレラ」『日本の説話』第二巻　東京美術　一九七三年　一三二―一五九頁

(5) 黄紹清、黄革搜集整理　『桂林文化』　一九八二年第一期

(6) 覃建真搜集整理欧陽若修ら編『壮族文学史』广西人民出版社　一九八六年

(7) 程蕾「『西陽雑俎』和民間文学」『民間文学』十一期　五五―五六頁

(8) 段宝林「略談『西陽雑俎』的描写研究」『楚風』四期　八六頁

(9) 唐　段成式『西陽雑俎』続集巻一　支諾皐上　二頁　唐臨溜段成式柯古撰　上海文瑞印行

(10) 壮族簡史編写組編『壮族簡史』広西人民出版社　一九八二年　五六頁

(11) 宋、笵成大原著　胡起望、覃光広校注『桂海虞衡志輯佚校注』四川民族出版社　一九八六年　一七九―二三四頁
(12) 藍鴻恩「『灰姑娘』和『達架』」前掲書　一六四頁
(13) 邢風麟「呉浚雲」『壮族歴史人物伝』広西人民出版社　一九八二年　九五―一〇一頁
(14)(15) 藍鴻恩「壮郷風采録」前掲書　一一八頁
(16) 胡仲実『壮族文学概論』広西人民出版社　一九八二年　一頁
(17) 尤中編『中国西南的古代民族』四四一頁（昆明）注を引用した。同書に「此書今本欠語あり、黄現璠編著『広西僮族簡史』より引用」とある。上記「桂海虞衡志」「渓蛮叢笑」の本文中には「僮、撞」の文字なしとの意見が提出されている。『民族研究』一九八〇年五号（北京）、『壮族文学概論』他
(18)『壮族簡史』、『壮族文学概論』及び君島監訳『概説中国の少数民族』三省堂　一九八七年等を参照した。
(19) 藍鴻恩　前掲書　一七六頁
(※) 百田弥栄子氏は「灰かぶりの素顔と主題考」と題して日本口承文芸学会第十一回大会で発表。その際資料として、氏の解釈により「灰かぶり」の類話百話近くを表に作成。「口承文芸研究」第十号（一九八七）に同名の論文を載せた。これらが参考資料として役立ったことを付記しておく。
(20) グェン・カオ・ダム、チャン・ベト・フォン、稲田浩二、谷本尚史編著『ベトナムの昔話』同朋舎　一九八〇年一月　四三―五三頁
(21) 岩喊英、岩呑搜集整理「檀香樹」『傣族民間故事選』上海文芸出版社　一九八五年　八七―九五頁
(22) 譚建成、張平、郭小東、韓伯泉整理「嵒哇鳥」『黎族民間故事選』上海文芸出版社　一九八三年　七二―一〇一頁
(23) 金条妹口述、楊再宏搜集整理「遂美」　楊通山、蒙光朝、過偉、鄭光松編『侗族民間愛情故事選』広西人民出版社　一九八三年　二〇三―二〇八頁
(24) 君島久子「日本の説話と中国の民間伝承―竹取、浦島、蟻通、姥皮、シンデレラ」前掲書　沢汪仁増整理「奴隷的女児」『中国民間故事選』第二集一九六二年人民文学出版社
(25) 代俄溝免汝口述、燕宝搜集整理「阿諾楚和阿諾訴」『彝族民間故事選』上海文芸出版社　一九八一年　一九四―二〇三頁

(26) 李竜梭口述、白章富搜集整理「水牛媽媽」『民間文学』　一九八五年三月　四八—五〇頁
(27) 李茂先搜集「金剪子姑娘」『大理文化』　一九八二年　三八—四一頁
(28) 馬学明口述、韓紹綱搜集「欧楽与召納」『苗族民間故事選』　上海文芸出版社　一九八一年　一七四—一八六頁
(29) 趙春生搜集整理「伊尔尕姑娘」『民間文学』　一九八四年第一〇期二六—二八頁
(30) 徳恭瑞口述、孟志東搜集整理「宝布和莎佳」『達斡尔族民間故事選』　上海文芸出版社　一九七九年　一六四—一六九頁
(31) 裴永鎮搜集整理「孔姫和葩姫」『民間文学』　一九八一年第七期一二—一八頁
(32) 費林整理「牛奶娘」『珍珠泉』山西人民出版社　一九八一年　八五—九五頁
(33) (22) に同じ
(34) 南方熊楠は『西陽雑俎』の葉限の一文を記したのち、「しかして、魚属その他動物の骨を尊敬する民族しばしばあるは Frazer, op. cit; pp.118-120,122 seqq.にその論あり。されば『雑俎』葉限、魚骨に祈って福を得し話は、支那南部に、旧くかかる崇拝、迷信行われたる痕跡ならんか。」と述べている。「西暦九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語」『南方熊楠全集2』平凡社　一九七一年　一三三頁
(35) 梁敏「揀骨葬—壮族主要的葬制」『民族研究』　一九八二年六月　六三—六八頁
(36) 梁敏前掲書に詳しく報告されている。
(37) 葉濃新「从民族学資料看広西地区古越人葬俗」『貴州民族研究』一九八八年第三期　一六〇—一六四頁
(38) 藍鴻恩　前掲書　一三七頁
(39) 黄昭、曲軍鋒他調査整理「田東県檀楽郷壮族社会歴史調査」　汪明瑀　曲軍鋒、郭漢材調査整理「東蘭県那烈郷壮族社会歴史調査」『広西壮族社会歴史調査』第五冊　広西民族出版社　一九八六年　一二二頁、一六四頁
(40) 『広西壮族自治区概況』編写組『広西壮族自治区概況』広西民族出版社　一九八五年　四九頁
(41) 山田琢『墨子』上　明治書院　一九七五年　二八二頁
(42) W・エバーハルト　白鳥芳郎藍訳『古代中国の地方文化』六興出版　一九八七年　一〇一、一〇二頁
(43) 凌純聲「東南亞的洗骨葬及其環太平洋的分佈」『中国邊疆民族與環太平洋文化』上　聯經出版　一九七九年　七五五—七

七七頁

(44) 斉藤忠『東アジア葬・墓制の研究』第一書房　一九八七年　四二四頁

(45) 凌純聲　前掲書

(46) 王克宋等「広西西林県普馱銅鼓墓葬」『文物』　一九七八年九期

(47)〜(50) 葉濃新　前掲書

(51) ヨーロッパでは「シンデレラ」とは別に「白い花嫁・黒い花嫁」の物語になっている。中国でも前半だけのシンデレラも後半だけの故事も存在する。だが多くは、この二話が一つになっている。